



2月、トリノの古典車ショー「アウトモトレトロ」にて。アウトビアンキ経営陣が勢揃いした有名な広報写真を模して、「なりきり」を楽しんでいるところ。いちばん左がマルコ会長。普段はイタリア公営放送に勤務している。

プチお宝ブランドの紳士たち

文と写真 大矢アキオ

今年がフィアット500の誕生50周年である。しかももう1台、半世紀を迎えたクルマがある。アウトビアンキ・ピアンキーナだ。歴史あるブランド『ピアンキ』の戦後における再出発として、フィアットとピレリも出資して設立されたのがアウトビアンキである。その初の車種として1957年に発表されたのがピアンキーナというわけだ。

ただしアウトビアンキのブランドは、日本にも輸入されて人気があったY10の後継車としてランチアY10が登場した1995年を機に消滅してしまった。

したがって、今日フィアット500が新型登場もあってチャホヤされているのに対して、ピアンキーナは日陰の存在になってしまっている。500が80年代の田原俊彦・近藤真彦

だとすると、ピアンキーナはさながら地道にギターと対峙していた野村義男のようなものである。

ところでイタリアには『レジストロ・アウトビアンキ』というクラブがある。直訳すればアウトビアンキ保存会だ。

5年前、初めて彼らのミーティングを訪ねたときである。

不躰にもボクは、「個人的には姉妹車である500のほうがスタイル的にはカワイイと思うんですけど、皆さんがピアンキーナを愛好する理由は？」と、質問してしまった。

しかし彼らは嫌な顔ひとつせず、「500よりも造りが上質だからだよ。紳士淑女が乗ってもリゾートの足として乗っても恥ずかしくない小さな高級車だった。新車当時は『平

日の500、週末のピアンキーナ』というキャッチがあったくらい」と、丁寧に説明してくれたものだ。

さらに別の年、今度は彼らが隣の州まで遠征してくるので、ツーリングに同行したときのことである。

コースの途中、ある小さな村でボクは道端のバスタ屋を見つけた。ショーウィンドーを見ると、今やイタリアでも

激レアな形のバスタを作っていた。ボクは思わずクルマを脇に止めて、ふらふらと引き込まれてしまった。

ところが外に出て驚いた。保存会のマルコ会長が笑って立っているのではないか。ボクが停車したのに気がついて待っていてくれたのである。彼いわく「この先、今夜の宿泊先まで道がわからなくなるといけな



今年彼らが企画した50周年祝いは、イタリア郵便会社と企画した記念消印。

約30台のピアンキーナに分乗した他のメンバーは先に向かっているにもかかわらず、またボクはアウトビアンキを持たない非公式追っかけにもかかわらず、である。

後日クラブの会報を見れば、彼らはチャリティで福祉施設にピアンキーナを乗りつけて子供たちを喜ばせたり、対独バルチザン記念碑に献花に行ったりしていることが判明した。

“プチお宝ブランド保存会”のおじさんたちの振る舞いは、どこまでも紳士なのだった。「1台のクルマに入り浸っていると、やがてそのクルマのような人になってしまう」といわれるが、それはどうやらホントである。